

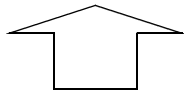
社会科における言語活動

社会科で身に付けさせたい力

社会科で身に付けさせたい力には、内容的なもの和方法的なものがある。内容的なものとは、情報、知識、理解、関心・意欲・態度であり、問いに答えることで身に付けることができる。また、方法的なものとは、問題発見力、資料活用 of 技能、思考力、判断力、表現力であり、問いに答えようとする中で身に付けることができる。

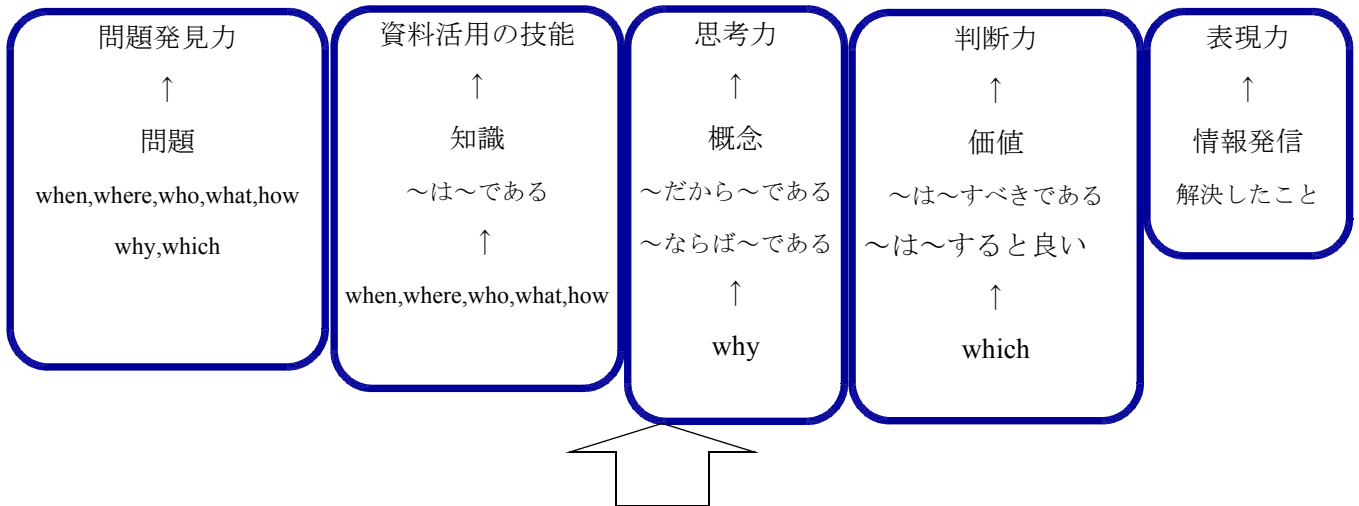
社会科で身に付けさせたい力 (小原 2009を加筆・修正)

内容的目標		問題	社会を知る	社会がわかる	社会に生きる	
						情報
問題発見力	資料活用 of 技能	表	「どのように、どのような」			
	思考力		「なぜ、どうして」			
	判断力		「どうしたらよいか、どの解決策がより望ましいのか」			



(小原 2009を加筆・修正)

言語活動のねらい = 「社会的事象や問題を読み解く力」の育成



重視したい言語活動

資料の読み取り

社会的事象の
意味・意義の解釈

事象の特色や
事象間の関連の説明

自分の考えの論述

言語活動のねらい

言語活動のねらいは、社会的事象や問題を読み解く力の育成である。社会的事象や問題を読み解く力とは、問題発見力、資料活用の技能、思考力、判断力、表現力であり、社会科で身に付けさせたい力のうち、方法的なものを指す。

問題発見力とは、「when, where, who, what, how, why, which」といった問いで問題を発見するための情報を獲得することができる力である。

資料活用の技能とは、発見された問題のうち「when, where, who, what, how」といった問いに答えることで、「～は～である」という知識を身に付けることができる力である。

思考力とは、「why」に答えることで、「～だから～である」「～ならば～である」といった概念⁽¹⁾を身に付けることができる力である。

判断力とは、「which」に答えることで、「～は～すべきである」「～は～すると良い」といった価値を身に付けることができる力である。その価値をもとにした意志や行動が態度⁽²⁾である。

表現力とは、問題が解決して得られた知識・概念・価値を情報発信することができる力である。

重視したい言語活動

重視したい言語活動は四つある。

一つ目は、資料の読み取りである。これは、発見した問題を解決するために必要な情報を収集するために「どのように、どのような」と問いかけ、収集した資料からまとめ、表現していく活動である。この過程で知識を身に付けることができる。

二つ目は、社会的事象の意味・意義の解釈である。人間が行った問題解決行為とその結果を追体験させるために、「なぜ、どうして」と問いかけ、人間の働きを目的・手段・結果の関係を軸に解釈し、共感的に理解していくことである。

三つ目は、事象の特色や事象間の関連を説明することである。これは、「なぜ、どうして」と問いかけ、その背後にある関係性を見付け、それをもとに科学的に説明する活動である。

二つ目・三つ目の活動で概念を身に付けることができる。

四つ目は、自分の考えを論述することである。これは、「どうしたらよいか、どの解決策が望ましいのか」と問いかけ、自分なりの考えをもち、それを論理的に表現する活動である。この活動で価値を身に付けることができる。

<注>

(1) 概念とは、構造的理解を指す。理解とはものごとの意味をつかむことであり、構造的理解とは、個々の事実の間の関係を見つめて、相互の関連を図って、中心と周辺などの仕組みや立体的なつながりをつかむことである。現象の因果法則、歴史的イベントの原因などの理解を指す。よって、前頁の図「社会科で身に付けさせたい力」にある理解とは、構造的理解を指す。(長谷川 2008 参照)

(2) 「情報・知識・概念」(以下、概念等)が偏っている場合、育まれる価値も偏り、偏った態度が形成される。ゆえに、態度形成には、広い視野に立った概念等を身に付ける必要がある。また、態度形成にかかわる学習過程全体を通じて関心・意欲が高められる。(文部科学省 2008、岡崎 2013 参照)

<参考文献>

- ・岡崎誠司 2013『見方考え方を成長させる社会科授業の創造(社会科の授業改善1)』風間書房
- ・小原友行編著 2009『「思考力・判断力・表現力」をつける社会科授業デザイン 中学校編』明治図書
- ・長谷川榮 2008『教育方法学』協同出版
- ・文部科学省 2008『中学校学習指導要領解説 社会編』日本文教出版